
恋って何？

リオ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋って何？

【Nコード】

N5610D

【作者名】

リオ

【あらすじ】

私は知らなかった。恋という意味を…気付いた時にはもう遅かった。

始まり

「おっはよーん」

元氣よく教室のドアを開けた。

私は、高校生。

今まで恋と言うものをしたことが無い。

自慢じゃないが…

「おはよつ。」

私の親友の佑ちゃんが話しかけてくれた。
佑ちゃんは、優しくて可愛い女の子。

もちろん彼氏持ち、

ラブラブでいいなあ

とも思う。

「何なーに？沙羅。あんた恋したいのー？」

あつ！ちなみに沙羅^{サラ}は、私の本名です。

私の後ろから、声が聞こえた。

どうやら考えていたことが顔に出てたらしい…

「久美うるさい！」

私は、久美に怒鳴った。

久美も私の親友でもちろん彼氏持ち。

佑ちゃんとは、正反対の元気な女の子。

そしたら久美はニヤつと笑って、

「根本……！！沙羅が彼氏欲しいってー

」！

なんて叫んでた。

私のクラスの根本くんは、

かなりモテる。

だけど誰とも付き合ったことが無いんだって。
なんでだろう？

「席つけー！」

うるさい先生が入ってきた。

私達は、高校へ入学してからまだ3ヶ月しか経っていない。

長々しい先生の話を上の空で聞きながら、

「空、綺麗だなー」

って呟いた。

「沙羅っ！」

気がついたら、佑ちゃんと久美に囲まれていて、

私の隣には、根本くんがいた。

「今日の放課後、根本と内らの彼氏と6人で遊ぼうと思うんだけど、沙羅くるよね？」

「行かないと怒るでしょ？」

「もちろんー！」

久美と私が話しているのを何故か、根本くんが聞いている。

私は、少し疑問に思った。

放課後デート

↓放課後↓

私は、半ば強制的に放課後デートというやつに付き合わされた。

佑ちゃんの彼氏の橘くんと久美の彼氏の永瀬くんと根本くんの3人は、仲が良いみたいだ。

3人でずっと話している。

でも、こんなことを許さないのが久美で…もう眉間にしわがよっている。

それに気が付いたのか、永瀬くんは久美の隣で手を繋いだ。

それにつられるように、佑ちゃんの手を橘くんが…

私と根本くんは、微妙な距離をあけて歩いた。

私達が校門を出ようとした時だった、

《《ドンっ！

私の肩におもいつきり誰かがぶつかってきた。

後ろを振り返ると細身で背の高い男の人が息をきらして立っていた。

「すみませんっ！」

私は頭を下げてあやまった

「…大丈夫です」

男の人は、そう呟いて、
走って行った。

どうやらあの人は、部活をやっていたみたいで学校の外を走っていたみたいだ。

「大丈夫？」

根本くんの声が聞こえた。

なんだろう？この気持ち…

胸がドキドキして、顔があつい。

私の心臓は、どうかしてしまったのか？

私は、初めてのこの感情に戸惑った。

それから私は正直何をしていたかよく覚えてない。

私の記憶は、あの人に会ってからあやふやだ。

でも、一つだけ覚えていることがある。

それは、久美の怒った顔。私が上の空だから、久美は怒ったみたい…
けど後は覚えていない。

そして、私は気がついたら家のベットの隅に寝ていた。

私は、素直にそのまま寝た

好きって気持ち

朝、教室へ行くと

「おはよー沙羅。」

と笑顔の佑ちゃん。

「おはよっ」

私は、それが嬉しくて笑顔になる。

「おはよーございます」

ちょっと不機嫌な久美の声が聞こえた。

私は、なんでだろうって少し考えた。

そして廊下に視線をやると

永瀬くん！

私は、心の中で叫んだ。

そう永瀬くんは、私のクラス的女子と仲良さそつに話しているのだ。

永瀬くんは、隣のクラスです。

ちなみに、橘くんは私達と同じクラス。

「私は、もう振られるんです…。」

私は、もう…。」

久美は今まで使ったことのないような言葉を使って、自己嫌悪におちいつている

そして、久美はヘナツと床に座って泣き出した。

久美がやっと泣き止んだので、私と佑ちゃんは、久美を見て保健室につれていこうとした。

「久美…保健室いこ？」

私は、久美を立たせ佑ちゃんと一緒に保健室へ向かった。

教室を出ると、永瀬くんがびっくりして

「久美、大丈夫？」なんて聞いている。

私と佑ちゃんと久美は見てしまった、

永瀬くんの隣にいる女の勝ち誇った顔を。

「……。」

久美は無言のまま立ち去ったので、私と佑ちゃんは久美の後を追った。

永瀬くんは、訳がわからずただ立っていた。

保健室についた。

私と佑ちゃんは、久美をベツトに座らせた。

「…私さっ、…別れようかな？淳と…」

途切れ途切れに言う久美の言葉。

瞳には、涙をいっぱいためて久美は呟いた。

^{あつし}
淳は、永瀬くんの下の名前。

「…辛い…、淳と…一緒にいる…と…淳、モテるから…今みたい
に…私じゃなくて…別の女の子を…優先するときもあるの…」

久美は泣きながら言う。

「久美、もういいから寝なよ。私達ここにいるから」

私は、久美に言って寝かせた。

私と佑ちゃんは、保健室の先生とここにいる理由を話して、ここに
居させて欲しいとたのんだ。

保健室の先生は、わかったと納得してくれた。

ふと窓に目をやると、昨日見たあの人が校庭でサッカーをしていた。
どうやら体育みたいだった

「…先輩だったんだ。」

私が小さくつぶやくと、

「私がこんななのに、沙羅は恋してんだ」

ちよつと嫌味ととれる発言にびっくりして後ろを向いた。

そしたら予想通り、にやけている久美の顔と笑顔の佑ちゃんの顔があった。

「初恋か…。」

佑ちゃんの意味ありげな発言にビクツとしながらも、そのまま流した。

そうか…これがこいなんだ。

こんなに胸が痛くて、顔が赤くなるほど…

これが好きって気持ちなんだ。

久美の決断

それから私達は、保健室を出て元気になった久美と一緒に教室に向かった。

教室につくと3限目の休み時間みたいで、永瀬くんは私達の教室の前に立っていた。

「久美…」

気まずそうに話かける、永瀬くん。

「ねっ、永瀬。今日デートしょ？」

久美は笑顔だった。

「えっ？あつ、うん。」

それを聞いて満足そうに微笑む久美。

そして、私達は教室に入っていた。

私は、久美のことだから今日別れを告げるのだろうと思っていた。

やっぱり…

久美は瞳いっぱい涙をためていた。

久美 side

運命の放課後。

あたしは、最後の思い出に淳とデートすることにした

それだけで？

っと思うと思う。

ただ女の子と話してただけなのにね、

あたしは、淳にとって何？

って考えたら、何も浮かばなかったんだ。

彼女：だよな？

って確認したいぐらい、よくわかんないんだ。

だから、淳、最後のわがまま聞いて？

部活休んでまで私と一緒に居てほしいの。

これで最後だから。

そんなことを思いながらあたしは、淳の待つ校門へ来た。

「淳っ、プリとろうか？」

あたしの言葉にびっくりしてあたしを見た。

「…！」

「ん？どうかした？」

「…淳って…。」

そう淳は、呟いた。

あたしは永瀬 淳のことを
今まで淳と呼んだことがなかった。

「ん？なんとなく…」

あたしは、はにかんだ笑顔を見せた。

淳は、ちよつと照れながらニコツと笑顔を見せた。

それからあたし達は、少ない時間でいっぱい遊んだ。

淳があたしの家までおくってくれた。

淳は、あたしにお別れのキスをしてくれた。

あたしと淳の唇が離れたときあたしは言った。

「…永瀬…別れて？」

淳はびつくりしてあたしを見た。

「…えっ？」

淳は、まだ状況が読めないようだった。

「……今までありがとう。さようなら」

あたしは、そう言い残し家に入った。

「……！！久美！」

後ろで淳の怒鳴り声が聞こえた。
だけどあたしは振り向かない。

終わったんだ。

そう思うと涙が溢れ出した

淳……淳……

思えば思うほど涙が止まらない。

あたしのケータイの音楽がなりやまない。

この着信音は、淳。

私は、電源を切った。

そして家の鍵をしめた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5610d/>

恋って何？

2011年1月15日23時24分発行